

4. 黒田工藝の昔と今

黒田工藝と四国工芸社

黒田工藝の創業は 1961 年 7 月である。会社には今も大切に保管されている帳簿があり、その帳簿の記録を辿ると 2022 年で 52 期を迎えた。創業者は黒田周悟氏の父・春夫氏であり、今治市北日吉町に個人事業として捺染工場を構えたのが歴史の始まりである。現在の北日吉町にある放射線第一病院の辺りが発祥地である。



黒田工藝本社正面（左）

黒田工藝のシンボルマークである「魔法使い」がモチーフになった鉄製の看板（右）

春夫氏は、第二次世界大戦において 2 回の召集を経験している。1 回目は中国、2 回目はフィリピンである。1 回目で中国から無事に帰還した矢先に再びフィリピンに赴き、フィリピンでは約 1 年間の抑留生活を送った。抑留生活からようやく解放され日本へ向かう復員船に乗船した日が、春夫氏の母親の命日となった。母親は生前、春夫氏の無事を祈って毎日神社に詣り、自分の命と引き換えに春夫氏の無事を祈りつづけたという話を、黒田氏は何度も親戚から聞いている。

春夫氏は、生きて日本に帰れたら、やりたいことがあった。絵を描くことだった。子供の頃から絵を描くのが好きだった春夫氏は、フィリピンから送還されてまもなく、「只図柄を描くんだと云う以外には何もなかった」（「ひとすじの道」『木洩日』152 頁）と述べているように、純粹に花の絵を描きたい一心で、1948 年の暮れに夕

オル業界に入った。こうして、黒田工藝を創業する前に今治タオル工業の歴史に名を残す四国工芸社で技術を磨いた。

そして、春夫氏が四国工芸社から独立するにあたり、キーパーソンとなった人物が八木又市^{またいち}氏である。八木氏は、黒田工藝創業時に建てた事務所の土地所有者であり、何より八木氏の配偶者は春夫氏の姉・イセミ氏であり、春夫氏の義理の兄にあたる。北日吉町の黒田工藝の発祥の地は、小さな川を有し、隣には丸沢染工の晒し場があり、黒田工藝の事業内容に打ってつけの場所であった。春夫氏はこの場所を八木氏の好意で借りることができた。

四国工芸社については、創業者の羽藤武氏が、今治タオル工業の戦前戦後の歴史を知るうえで貴重な資料を残している。それが『おごの川』（自費出版まつやま、1992年）と『続・おごの川』（自費出版まつやま、1998年）の2冊である。

羽藤氏の著作（『おごの川』）によると、羽藤氏は、愛媛県立工業講習所（のちの愛媛県染織試験場、現在の愛媛県産業技術研究所繊維産業技術センター）を卒業し、綿布工場などで技術者として研鑽を積んだあとに、師である菅原利鏝^{としはる}氏（工業講習所時代の恩師であり愛媛県染織試験場の初代場長）の助言を受けて、今治で最初の紋工所となる羽藤紋工所を1939年に開業した。そして戦後の1948年に四国工芸社と改称し、1962年には株式会社に改組して規模を拡大した。

1960年代になると、四国工芸社では、斬新なデザインをタオル業界に導入していき、なかでもドイツの新しい顔料を使って楠橋紋織で商品化を依頼したプリントタオルは徐々に好評を得て、ジャカードタオルよりも高級品として市場に出回るようになった。

1960年代後半以降、四国工芸社から独立して事業を始める者や時代の波に乗って捺染工場を経営する者が増加した。企業数のピークは1990年代初頭になるが、捺染加工業界の全盛は、昭和30年から平成に入るまでである。

黒田工藝も四国工芸社からスピアウトした企業のひとつであり、

創業者の春夫氏は四国工芸社時代から取引のあったタオルメーカーと重ならないように配慮しながら、いくつかのタオルメーカーと取引を開始した。たとえば、田中産業（株）、木村タオル、阿部直織維産業（株）などであり、春夫氏の独立時に支えてくれたのもこれらのタオルメーカーであった。田中産業以外は現在廃業しているが、田中産業は今でも黒田工芸の主要な取引先である。

黒田工芸は、創業から10年後の1971年7月に株式会社に改組した。それまでは家族経営に近いものがあったが、法人化して以降、少しずつ従業員数も増え、設置機械も刷新され生産性が向上した。

黒田氏のプライベートに触れると、1985年、黒田氏は35歳のときに周子氏と結婚した。周悟と周子。偶然にも「周」というおなじ漢字が入った名前が縁となった。そして、長男の真平氏、長女の千夏氏、次女の三紗氏の3人の子宝に恵まれた。

黒田工芸のひとつの節目

黒田工芸のひとつの節目は、1990年に今治駅の区画整理の際に、創業からおよそ30年を過ごした今治市北日吉町から現在の今治市東村南に移転したときである。移転に際しては、今治市から好条件を提示されたが、その権利をすべて八木又一氏の家族に譲った。移転は家族全員を巻き込む大きな決断であったため、一応家族会議をもったものの、父親の腹はすでに決まっていた。その席で父親はこう言った。「八木の叔父さん、叔母さんには世話になったから、すべての権利は放棄してここを出ていくぞ。今まで助けてくれた奥義があるから、わかるな。」こうして、黒田工芸は現在の場所に移転し、再スタートを切った。

1990年代以降はバブル経済の崩壊や経済のグローバル化の進展などによって日本の製造業が転換期を迎えたときであり、戦後右肩上がりの成長を遂げてきたタオル工業も例外ではなかった。厳しい時代の幕開けとなった1990年に、黒田工芸は新しい場所で事業を

継続することになったわけであるが、拠点を变えても堅実な経営をつづけてきた。

現在は、自動スクリーン捺染機で最大15色のプリントが可能。一ノ瀬式7000番による広幅生地のプリントをはじめ、高速プリントが可能なオートスクリーン捺染機による量産向けプリント、製版の必要がなく色数制限のないインクジェット機による小ロット・短納期向けプリントをおもにおこなっている。



工場内に設置された一ノ瀬式7000番

プリントする生地は、ハンカチタオルやフェイスタオル、バスタオル、タオルケットなど一連のタオル製品に加え、Tシャツやのぼり、エコバックなど幅広い。



小ロット用の捺染機

黒田工芸では、ベーキングやソーピングなど後処理加工を自社でおこなう場合もあるが、商品によっては産地の染色加工業者に依頼し、その段取りは黒田工芸が担う。これも黒田工芸がタオルメーカーから頼られる理由でもある。



「台所」と呼ばれる色を調合する実験室



色の調合はミリ単位

自社ブランドはほぼなくなったが、タオルメーカーとのコラボで新しいプリントタオルを生産

黒田工藝は、1990年代には「デザイン室」に20名ほどの女性デザイナーを抱えており、今でこそコンピュータグラフィックに代替されたが、当時は水彩画などを手で一枚一枚丁寧に描いていた。デザイナーの大半は今治市出身で今治工業高校の卒業生であった。



本社内にあるデザイン室にはたくさんの

デザイン関連の著書がある

黒田工藝では、問屋から商品企画のもち込みもあれば、タオルメーカーとのコラボレーションで商品開発もおこなったが、自ら積極的に動けばそれだけ仕事を受注できた時代であり、かつては頻繁に自社オリジナルのデザインを考案していた。そのため、黒田工藝では20人ほどのデザイナーが必要であった。

写真製版による写実的なデザインで手の込んだ製品もあれば、幼児

向けのデザインをシリーズ化した製品もあり、手掛けた製品はさまざまなのである。こうした製品をタオル専門問屋にもち込んだり、あるいは大手の総合スーパーに直接売り込みをかけたつもりもした。プリントのデザインのみならず、部分的な刺繍やワッペンを使ったタオル全体のデザインの提案もおこなった。また、店頭でのタオルの棚取りのために「パパ、ママ、ぼく・わたし」という昭和時代の典型的な4人家族を想定したデザインをシリーズ化するといったような、戦略的な提案もしたことがある。



デザイン室には多くのサンプルが

置いてある



1990年代、20数名のデザイナーがいた時代

（黒田春夫『木洩日』149頁より引用）



タオル地に写実的なプリントを施した製品（写真製版）


シリーズ物としてデザインされた
プリント原画（プレゼンション・マ
ップ提案図）





高度な技術が必要なジャカードプリント、
凹凸があるところにプリントを施す

黒田工藝は今治タオル工業の老舗タオルメーカーである楠橋紋織（株）とも長い間取引関係にあるが、黒田氏がここ最近で「われわれの発想にない、ちょっと違ったセンスでタオルをつくっているな」と感心している、楠橋紋織のタオルシリーズがある。それが、楠橋紋織が森田 MiW 氏とコラボした「moritaMiW」シリーズである。2017年の販売以降話題を呼び、商品ラインは年々増えている。

moritaMiW シリーズは、楠橋紋織が製織、染晒加工は越智源（株）と蒼社染工（株）、捺染加工は黒田工藝がそれぞれ担当している。ティータオル  やタオルハンカチをはじめ、タオル生地の小物入れ（ポーチやトートバック）など女性をターゲットにした商品であり、ステーションリーや磁器の小皿もシリーズ商品として販売している。



moritaMiW シリーズのティータオル



細かなプリントが施されている

このシリーズは、楠橋紋織の企画開発部に所属する阿部泰子氏がリードした企画製品である。阿部氏と黒田工藝は、阿部氏の父親の代から縁がある。

阿部氏の父・鶴雄氏が染料の専門商社である村上産業（株）に勤めていたころ、黒田氏に染料を使ったプリント「おぼろ染め」を紹介した。これをきっかけに黒田工藝では染料プリントを開始し、おぼろタオルのブームに乗ることができた。おぼろ染めとは、ナフトール染料を使って緯糸のみを染め、柄や文字を出す方法である。白色のタオル生地に紺色、赤色、えんじ色、橙色の4色が主流でバリエーションはあまりないが、緯糸に色が染め込んであるため、色落ちしにくい。

今治でおぼろタオルが生産されるようになったのは昭和20年代であり（「今治捺染工業協同組合提供資料「捺染業界ビジョン調査事業報告書」（1985年）、10頁）、企業や旅館などの名入れタオルとしていっとき人気を博した。

分業によって切磋琢磨していくことが大事

タオルは、細かい分業によって生産され、それぞれに担い手がいる。黒田氏は、「分業によってお互いが切磋琢磨する関係にある」と考えている。黒田工藝は、タオルメーカーの田中産業や楠橋紋織（かつては旭染織、中忠、鍋島などは得意先であった）、染物材料問屋の村上産業やクラウン樹脂化工など、産地内の分業体制を大切にしており、捺染以外の領域に参入する気はない。「棲み分けの論理」を大切にしている。父親の春夫氏もおなじ思想の持ち主だった。「ひとすじの道」（『木洩日』153頁）には、「色彩画家とちがって私達の世界はそれは地道だと云うか“メーカーの縁の下の力持ち”だと云う域を出ることは出来ない。これは自主性のもてぬタオル用デザインだと云う宿命だからである」と記している。

また、黒田工藝には生業を盛り上げる、頼もしいサポーターがい

る。実弟の洋次氏は専務取締役として、長男の真平氏は常務取締役として、それぞれの立場から会社の技術面および運営面で黒田氏の右腕として日々活動している。

学生時代から始めたサッカーで地域貢献

タオルづくりをとおして地域の発展にコミットするのみならず、「タオルびと」2022年8月号でも述べたが、黒田氏は愛媛県立今治東中等教育学校のサッカーの外部コーチを長年務めており、地元のサッカー振興に一役買っている。また、一般社団法人愛媛県サッカー協会東予担当理事、そして30年連続して今治サッカー協会副会長を務めており、サッカーを介して地域活性化にも尽力している。

（次号につづく）

